



〒892-0841 鹿児島市照国町13-42 カトリック鹿児島教区 電話099(26)5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部

道 標



教会の広報活動を見直す

四月の定例司祭会議

十七日に行われた定例司祭会議で、教区の広報に関する二つの議案が取り上げられ、活発な意見交換がなされた。議題は、カトリック新聞の購読者獲得と鹿児島教区の公式ホームページの公開の件だった。

カトリック新聞

購読のお願い

「カトリック新聞の購読者数の増加に是非主任司祭の協力を」と訴えたのは、カトリック新聞社の社長と営業部長。新聞の購読者が百人中三人しかいない鹿児島教区の現状を説明し、全国と世界の教会の情報を得

るためには今のところ日本の教会ではカトリック新聞(週刊)しかない。そのため、カトリック新聞の普及のために四週間の無料配布キャンペーンを実施している」と説明した。「司祭が信者一人ひとりに四週間無料配布の申し込み用紙を手渡すことで、確実に購読者が

増加することは実証されている」とも語った。

これに対し、司祭団からは、「概ね信者はカトリック新聞自体に関心がない」「記事の内容が信仰を妨げるものも多い」などの意見が出された。これに対して、新聞社側は「新聞はジャーナリズムの視点で記事を書いている。信者の信仰の妨げになるような事件の掲載はなるべく避けるようにしているが、一般のマスコミで報道された事件について、口を閉ざすことはでき

南日本文学賞受賞

ザビエル 田ノ上淑子さん



「夫から書く力をもらっている気がする」と優しい眼差しで話してくれるのは、二〇〇六年度の南日本文学賞(小説・文芸評論部門)に輝いた田ノ上淑子さん(六十一歳・ザビエル教会所属)。応募作四十六編の中からの見事な受賞と

なった。受賞の小説「隣人の影」は、認知症の女性と若い妊婦との関係の描写が高く評価された。田ノ上さんが書くことを始めたのは、教師として務めていた大口明光学園を育児のために退いた約三十年前。それからは同じく教員だったご主人・紀男さんの転勤のため離島を含め県内各地を巡った。島の人々との温かい心の交流も彼女の財産になっている。病に倒れ、寝たきりになって六年というご主人を看ながらの執筆活動。なのに「夫から力を」と言わせる彼女、だから、手掛ける作品が人の心に届くものに仕上がっていくように感じられた。

ない」などと答えた。

鹿児島教区の公式ホームページの公開

「日本の十六教区のうち、まだ、教区の公式ホームページを開設していない四教区の一つが鹿児島教区だった」と語るのは教区広報部の中野神父。約九か月の準備期間を終え、特異なスタイルで、お目見えすることになった。ホームページでは毎月発行されている「カトリック

「司祭のための祈り」を認可

郡山司教は四月九日付で「司祭のための祈り」を認可した。

この祈りの作者は、ドン・ガブリエル・アーモンド神父で、彼は教皇から祓魔師(新教会法第一一七二)に任命されている。

司祭のための祈り

「永遠の大祭司であるイエス様、あなたの司祭たちを、誰も触れることのできないあなたの御心に、安心できる隠れ家としてかくまってください。

毎日あなたの聖なる体に触れる聖別された司祭たちの手を清く保ってください。あなたの至聖なる御血で赤く染まる彼らの唇を清く保ってください。

鹿児島教区報」が閲覧できることと、北薩地区、南薩地区、大隈地区、奄美大島地区、徳之島地区にそれぞれ情報発信人をお願いすることになった。情報発信人は以下の通り。大松正弘神父(北薩地区)、泉 浩二神父(南薩地区)、マルコ・ヴィゴロ神父と松田清四朗神父(大隈地区)、末吉卓也神父(奄美大島地区)、福岡英雄神父(徳之島地区)。

各地区の情報発信人はそれぞれ自分のパソコンから毎月定期的に教区のホームページに地元の情報を入力することになる。会議の席上、ホームページ作成に携わっている藤山義和氏(玉里)がIT社会の現実を説

ヨゼフ・タム ヨハネ・ドウク 助祭が司祭に叙階

マニラでの叙階式に鹿児島から巡礼団 五月三十一日(木)、マニラにある聖カルロス大神学校で午前九時から開催される司祭叙階式に鹿児島教区から郡山司教をはじめ十七人が参列することになった。なお、叙階式後、十五人は六月五日までベトナムを巡礼することになっている。

明し、以下の三つの点で社会生活面での革命が進んでいると主張した。

- 1・携帯電話、電子メールで育った若い世代にはインターネットは生活の一部になっている。
2・地域や弱者の格差が解消されていること。誰でも、どこでも情報を得交換できる。

3・二十四時間サービスが可能、いつでも情報を得交換できる。

キリストの福音を万民に伝える手段として、印刷物に加え、電子による広報活動を再認識する機会となった。教区のホームページアドレスは次の通り。 <http://sgano.net/colk>

護

- (3) デイサービス・訪問看護及び訪問看護事業
(4) 育児支援事業
(5) 作業所など
またこの構想には聖堂、宅老所、賃貸住宅の複合施設も含まれている。
「聖の郷」(ひじりのさと)と銘名されたこの構想の趣旨は「これからの社会は、少子化や高齢化が深刻な問題として予想されます。介護の必要なきにも、ともに信仰を分かち合い、主を賛美し、感謝できる施設を造ることを提案します」となっている。

郡山司教

「唐湊司教館周辺開発構想」を公表

四月十一日に行われた司祭評議会と十六日の教区司祭会の席上、郡山司教は「唐湊司教館周辺開発構想」を公表した。これは、二〇〇四年から聖母寮を使ってデイサービスを行ってきた自

主グループ「ゆらいあい」(教区報四月号四面参照)から提出された構想を公にしたもの。それによると、(1) 宅老所 (2) 介護付有料老人ホーム (特定施設入居者生活介

これを聞いた司祭たちからは「これは夢物語だ」との声も上がったが、司教の主導で私的諮問機関を使っ、堅実で、納得のいく構想の検討へと委ねられることになった。

YET

団塊の世代が 定年を迎える時機になつてきた。戦後の第一次ベビーブームに生

を受け、戦後をつくってきた人たちが。そんな人たちの今後の生き方に注目が集まっている▼先日、小椋佳さんがテレビで定年を迎える世代は「もう」と言うか「まだ」と思うか、心構えで生き方が変わってくと話していた。感心させられた▼人は苦しみに見舞われると、いや疲れてくると、目標はあっても「もう」と弱気になってしまふ。強くないのが人間だから当然のことか。そんなとき、「まだ」と思わせてくれる何かを身につけることができれば：そう思う▼四月十五日に起工式をすませた旧ザビエル聖堂再生にかかわった人たちは、特に残りの人生をかけてこの大事業に取り組んでいる土田充義さんは、何度この「もう」を発するところまで追い込まれたのだから▼移築先が見つからず、また人手不足、資金不足で八方ふさがり。そこに私財を投じ奮起したのに、白紙に戻されるという憂き目の多い夢だった▼だから心に「もう」が忍び寄っていたはず、それを「まだ」と踏みとどまらせてくれたのは、彼の保存・再生にかける飽くなき情熱と戦後に建てられた旧聖堂建設に携わった人たちの哀愁とでも言うべき思いだったに違いない。もう一踏ん張り、「それでも」と希望をつなぐことの大切さを教えられた。

浦上街道を歩き殉教者の苦しみを体験 中高生が長崎を巡礼

報告と感想



徒歩巡礼で西坂に到着

昨年お休みした「中高生の長崎巡礼」を三月二十七日から三月二十九日に実施。参加者は十一人と少なめだったが、郡山司教、リーダーとしての青年たちの参加もあり今までにないメンバーとなった。そして今回の巡礼の特徴として、列福を控えた「薩摩の殉教者・レオ税所七右衛門」について学ぶことができたこと。また以前この巡礼でも行っていた二十六聖人の歩んだ

道＝浦上街道(時津の港から西坂の丘まで)を二時間四十分かけて歩んだこと。結果、今までになく参加者それぞれが信仰について、殉教について考えることができ、主催者側もほっとすることができた。(担当司教・泉浩二)

三月二十七日から二十九日にかけての三日間、長崎への中高生巡礼に参加しました。

中でも一番心に残ったのは、二十六聖人が通ったとされる浦上街道を二時間四十分かけて歩いたことです。途中でロザリオの祈りをしながら十キロを歩き通しました。西坂で見た二十六聖人の中には、当時十五歳だったルドビコ・茨木さまがいました。私と一歳しか違わないのに、信仰のために自分の命までを犠牲にしたルドビコさまはすごいなあと思いました。(ザビエル教会 小郷 愛)

ブイジュ神父の墓参

奄美カトリック女性連盟

奄美カトリック女性連盟では、三月二十一日(水)に瀬留小教区を訪問しました。瀬留小教区(信徒数四一五)には七つの教会があります。東シナ海に沿って集落があり、背後に芭蕉やソテツの群生した山の起伏が続いています。「サンタ・マリアの島」と言われるのにふさわしい風情です。

この地は、明治二十年代に外国人宣教師たちによって宣教が始まりました。当時の宣教師たちは徒歩で山道を越えて集落へ向いました。



途巾、瀬留区内にあるブイジュ神父様の墓参りをしました。神父様はフランス人で、大正十四年に五十歳で天に召されました。墓は信徒たちによって守られています。

想しました。その後は、日力連「いのちを守る基金」から社会福祉法人クリスト・ロア「希望の星学園」に見舞い金として十万円を頂きました。園を訪ねて贈呈しました。園を案内していただき、園児たちも職員たちの温かいお話を聞き、幸せに生活しているように見られました。神のお恵みをたくさん頂いて成長するよう願います。

+KABAYAN SEKSIYON+

"Pagpapatuloy sa Paghaling Apostoliko"
Para palaging manatiling buo at buhay ang Mabuting Balita sa Simbahan, nag-iwan ang mga alagad ng mga Obispo bilang kahalili nila. Binigyan nila "ng kanilang sariling katayuan na may kapangyarihang magturo". Subalit ang pagpahayag apostoliko o ng mga alagad, na ipinaliwanag sa isang espesyal na paraan sa libro ng inspirasyon, ay kailangan mapanatili sa pagpapatuloy ng linya ng paghalili hanggang sa katapusan ng panahon". Itong buhay na paglipat, ay isinagawa diyan sa Banal na Espiritu, tinatawag na Tradisyon, dahil ito'y may pagkakaiba sa Banal na Kasulatan na kahit may kaugnay ito. Sa pamamagitan ng salit saling sabi o Tradisyon, "Ang Simbahan, sa kanyang turo o doktrina, buhay at pagsamba, panghabang-panahon at paglipat sa bawat salinlahi ang lahat ng kanya, at lahat niyang pinaniniwalaan". Ang mga salita ng santo Papa ay mga pagsaksi sa buhay na binibigay presensiya ng Tradisyon, ipinakikitang kung gaano ito kayaman sa pagbibigay ng pagsasana at buhay ng simbahan, sa kanyang paniniwala at pagdarasal".

Ang sariling-pagpahatid ng Ama na ginawa sa pamamagitan ng kanyang Salita diyan sa Banal na Espiritu, ay nanatiling presente at gumagalaw sa Simbahan. "Ang Dios, na sa unang panahon ay nagsalita ay patuloy na nakikipag-usap sa kanyang Asawa diyan sa kanyang hinirang na Anak. At ang Banal na Espiritu, Sa pamamagitan ng buhay-bose ng Ebanghelyo ay tumataginting sa Simbahan-at sa pamamagitan niya -sa buong mundo-at dinadala ang lahat ng nanampalataya sa kaganapan ng katotohanan at ang Salita ni Kristo ay nanahan sa kanila ng punong-puno ng yaman".

Tayo ang mga buhay na simbahan mga Kababayan. Gusto ng Diyos na manahan sa atin buhay at puso ang kanyang Salita, si Kristo Jesus na punong-puno ng yaman sa pagmamahal at awa. Manatili tayo sa kanya hanggang sa wakas ng panahon at diyan natin makikita ang tunay na kahulugan ng buhay at kaligayan na naghihintay sa atin.

レデンプトル宣教修道女会 創立五十周年記念の集い

日時 5月3日(木)
14時 講演 郡山健次郎司教
15時 感謝ミサ
場所 カトリック谷山教会
祝賀会

司教執務 室便り

「それでも」考(1)

多くの方から叙階記念日や復活祭のカードを頂いた。そして、やはり、 motto について述べられた方が何名かおられた。皆さんの信仰生活に意味のある言葉として確実に定着しつつあることが分かって嬉しかった。

しかし、「それでも体験募集」となると筆が進まないうちから、確かにそのうかもしくはない。体験を文字にするのは難しいと思う。それに、みんなの中に「それでも信仰体験」が定着し、身近な人々に語られているなら、敢えて体験を募集する必要はないかもしれない。

ともあれ、最近、「それでも信仰体験」を何か特別な出来事に限定して



も、最終的には、「喜び・希望・感謝」を味わうことが出来る。それに、いつまでもこじれた関係を引きずることもない。それには、神様の前での孤独な祈りが求められることは言うまでもない。

こうした基本的な信者の生き方を身につけるのに「東洋の瞑想とキリスト者の祈り」や岡神父様の内観はとても有効。また、一番手っ取り早いのは、人間関係を断つ、辛い体験をした時、「それでも」を口にして一息入れる練習を忘れないこと。必ずや新しい光が射すはずだ。次号に続く。

薩来園が開設三十五周年

恩人ヴィデンマン神父の記念碑を除幕

開設三十五周年を迎えた知的障害者更生施設「薩来園」(林優子園長)では、四月三日(火)その記念式典を挙行了。女性のためだけのこの種の施設は全国でも数少ないという。薩来園(薩摩川内市入



園を見守るヴィデンマン神父の記念碑

来町)が開設されたのは一九七二年四月一日。社会福祉事業、特に知的障害者のための施設に強い関心を持っていた地元信徒・牧田汎耕さん(医師)が土地を寄贈した。当時の川内教会主任司祭ヴィデンマン神

父(昨年十二月七日帰天)は牧田さんの意志に賛同し、地方自治体や当時の教区長系永司教に働きかけるとともに、経営してくれる修道会を探した。困難な事業の引き受け手はなかなか見つからなかったが、シヨフアイユの幼きイエズス会メー

際、ヴィデンマン神父はこの件につき相談、その後アンネット・ベリユベリ管区長の判断で同修道会が経営母体となる「聖櫻会」で引き受けてくれることとなった。一九七〇年には重度棟

マリア山荘がホームページ 昨年から黙想会等開催します元気な様子の溝辺教会(マリア山荘)ではこの復活祭には4人が受洗、またホームページを開設し県内外の方に広く利用を呼びかけている。
<http://www.mariasansou.com/>

が完成し定員も現在の七十人となった。また二〇〇〇年一月には老朽化の進んだ建物をバリアフリーで人に優しい環境に建て直し、牧田さん、ヴィデンマン神父の遺志を引き継いでいる。薩来園に入るとマリア像が来園者を迎えてくれる。そしてその少し先の芝生と花で飾られたスペースに牧田さんとそしてこの三十五周年を記念して建てられたヴィデンマン神父の記念碑が立っている。



マリア像設置 紫原教会(竹山昭主任司祭)の庭にマリア像が設置され、その祝別・除幕式が四月八日(日)に行われた。設置されたマリア像は、宮崎カリタス修道女会滑石修道院にあったもの。実は庭にマリア像を

▼レジオ鹿が黙想会 三月七日(水)レジオ・マリエ鹿児島コミチウムは、ザビエル教会で黙想会を開いた。講師は頭島光神父(レデンプトルム)で、「現代における信仰の証」について、列福間近いベトロ岐部と百八十七人の殉教者から学んだ。 ▼希望の星学園園長 知的障害児施設「希望の



星学園」の新園長に田下哲朗(瀬留小教区信徒)さんが就任した。 ▼小神学生を励ます会 四月四日(水)夜、教区本部に小神学生とその家族を招き「小神学生を励ます会」が開かれた。

というのは、前主任司祭小平卓保神父(二〇〇五年八月帰天)時代から計画されていたもので、その実現のために信徒たちは移設費用や庭の整備費を貯えてきた。 紫原教会が誕生したのは一九七一年、三十六歳となった教会がまた一つ地域に安らぎの場所を提

5月 今月の暦

- 3日(木) 聖フィリポ 聖ヤコブ使徒
- 6日(日) 復活節第五主日
- 7日(月) ザベリ才会黙想・くじ11日
- 13日(日) 復活節第六主日
- ▼世界広報の日(献金) 福音宣教はわたしたちの使命です。「世界広報の日」は、この福音宣教の分野の中でもとくに新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、映画などの広報媒体を用いて行う宣教について、教会全体で考え、反省し、祈り、献金をささげる日です。日本のようにマスコミや技術の進歩している国で、広報が社会や文化に及ぼす影響ははかりしれないものがあります。広報の重要性を再認識し、広報を通して社会と人々にどのようにかかわっていくことができるか、また、実際どのようにかかわっているかを考えることが大切です。
- 「世界広報の日」は、第二バチカン公会議で定められ、一九六七年以来、毎年、特別のテーマが決められ、教皇メッセージが出されています。
- ▼経済問題評議会(旧教区財務委員会) 教区本部・14時
- 14日(月) 聖マチア使徒
- ▼レデンプトルム会例会
- 17日(木) ベルナルディーノ神父叙階記念日(一九九八年)
- 20日(日) 主の昇天
- ▼カトリック北薩大会・大口明光学園・10時30分
- 27日(日) 聖霊降臨の主日
- ▼典礼研修会・ザビエル教会・13時30分
- ▼教区司祭地区財務委員会・教区本部・14時
- 28日(月) 三教区司祭合同黙想会・別府・くじ6月1日
- ▼フリチエル神父霊名(ウイルヘルム)
- 31日(木) 聖母の訪問

使命を再確認

四月五日(木)、カテドラルに教区内各地から司祭二十五人と助祭二人が集まり、郡山司教を囲んで聖香油のミサをささげた。司教と司祭の絆を表し、司祭職を称えるこのミサの説教で司教は「司祭も信徒も同じ油が塗られ同じ使命を受けている。油を注がれた私たちは、まず自分自身の中に遣わされていることを認識し、心から回心

門田 明氏の 鹿兒島とキリスト教 ⑫ ザビエルと種子島 これまで、現在の鹿兒島付近を中心に宣教活動をしてきたザビエルについて話してきたが、彼は種子島にも立ち寄ったと言われる。 ただ、それが鹿兒島に来る途中であったのか、豊後を船出し南に向ったゴアへの帰り道であったか、両論可能のまま、今日に至っている。 昔、種子島では、日本に向かう海上交通の要路になっていて、外国の船がたびたび訪れている。一五五二年八月十四日、ここに上陸した宣教師のひとりペドロ・デ・アルカソバ

は手紙のなかで「われわれが日本に最初に到着した土地は、種子島と呼ばれる島で、フランシスコ神父がすでに訪れたところだ。この領土はわれわれを大いに歓迎してくれました。われわれは、そこに八日間滞在し、その間、島民によって非常に親切なもてなしを受けました」と書いている。

このように、アルカソバは、往きとも帰りとも断定してないが、帰路説の場合、フランシスコ・ザビエルは一五五一年十一月の終わり頃、日本からマラッカに帰る途中、種子島に立ち寄り、種子島はザビエルが日本で訪れた最後の土地になったことになる。 著名なキリストン研究家デイエゴ・パチエコ氏は、論文「ザビエルと種子島」(鹿兒島県立短期大学地域研究所『研究年報』第二号、一九九二)で両論の可能性を詳しく論じておられる。興味ある方は参照されるとよいと思う。

その後キリストン禁制時代に入っ て、島津藩主の母カタリナ永俊尼が信仰を強く護り、この島に流されたが、この島が宣教師たちゆかりの地であった事実や、島の人々の心に他郷の人に対する温かい思いやりの伝統があったことは、流刑の身にさぞかし大きな慰めになったことであろう。ザビエル訪問の島に何か信仰的予兆を感じるのである。(玉里教会信徒・ザビエル上陸顕彰会会長)

【お詫び】 教区報三・四月号で以下の司祭の叙階記念日、霊名の祝日を掲載してありませんでした。お詫びいたします。 教区広報部

- ▼成相明人神父(引退・在東京) 叙階記念日(三月十九日・一九六七年)、霊名の祝日(ラサール・四月七日)
- ▼アン神父(ザビエル教会助任) 叙階記念日(四月二十二日・二〇〇六年)
- ▼橋口啓悟神父(大熊教会主任) 叙階記念日(四月二十九日・一九九六年)



新風 ◆ 空の墓 ◆

死になって探そうとします。イエス殺害の計画を用意周到に企て、その目的を達成して、墓に封じ込められたはずのイエスの遺体がない。「空になった墓」はそんな人間の思惑が水泡に帰したことを示唆しています。

同時に、イエス殺害に加わっていないと思われる善良な人でも、しばしば、愛する人を失った喪失感。努力が報われなかった無力感。夫婦であつてもふと襲われる孤独感。豊かな暮らしでも忍び込む虚無感。これらはすべて「空になった墓」に等しいのではないのでしょうか。そんな空になった墓を再び人間の思いで満たそうとしてはいけません。酒や、ギャンブル、衝動買い、遊行などで満たしてはいけません。せつかく神様が準備してくださった「空の墓」だから、聖霊で満たしてもらいたいです。(H・N)

イエスの復活の出来事は空になった墓の確認から始まります。三日前、納めておいたはずのイエスの遺体がない。人はこの事実の確認と何故そうなったかの原因を探ります。マグダラのマリアは「墓から取り去られた」(ヨハネ福音書20章2節参照)と直感します。誰かが持ち去ったのだ考えたのです(ヨハネ20章15節参照)。一方、空になった墓の理由として、祭司長たちは兵士たちに多額の金を与えて、「弟子たちが真夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んでいった」とあちらこちらで言わせました。(マタイ福音書28章13節参照)

理性で解明できない出来事に遭遇したとき、人はすぐに推理を働かせます。そして、その推理がまるで事実であるかのように思い込んでいきます。「空の墓」を目の当たりにして、人は「空になった墓」の訳を必

シリーズ「教区財政を考える」(土) 慢性的赤字の教区会計にご理解を!

○教区会計は誰のため?
それは教区司教のためです。

○教区司教は誰のため?
それは教区民のためです。

しかし、教区司教は日本の教会と、また教皇を通して、全世界の教会とも繋がっています。このように一司教の任務と使命はとてつもなく広く、かつ、深いのです。この司教の活動を支えているのが皆さんの祈りと経済的支え、つまり、教区会計なのです。

○司教は教区の「父」的存在
天の神さまこそわたしたちの父ですが、目に見えない形で天の父の代理を果たすのが、司教です。司教は天の父の心を持って、教区内の司祭、修道者、信徒と接します。聖パウロのように「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」(ローマの信徒への手紙十二章十五節)時には、悩むのがパウロ郡山健次郎司教です。

○教区会計は慢性的に赤字
教区会計は毎年六百万ぐらいの赤字を引きずっています。赤字の補填(繰り入れ)はこれまでずっと教区司祭地区会計からなされてきましたが、この一、二年で限界に達します。教区会計が赤字だと、司教の活動が制限されますし、将来に対する計画も何も実現されません。

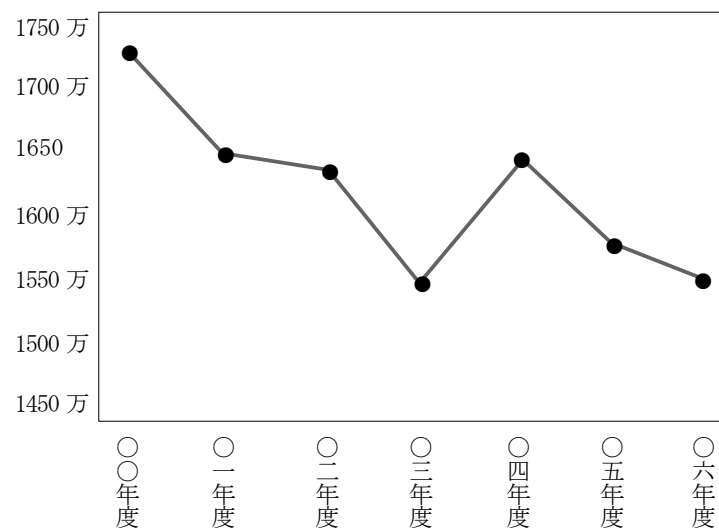
○小教区の活性化のため
ある旅立ち—テイエン神父

「私はいつもあなたのために祈ってますよ」と口癖のように、職員に挨拶してくれたテイエン神父が研修の場とも言えたザビエル教会を後にし、四月十二日(木)、多くの信者達の見守る中、赴任地の種子島へと向った。ベトナムから来てもらい誕生した司祭第一号の旅立ちだった。夕方になるとロザリオを手にして繁華街を歩きながら祈りをささげていたテイエン神父さん。「私はこの町のためにも祈っています」この情熱が、種子島の人々のもとへ届きますように。

に司教訪問がある
若くて元気な郡山司教はお呼びがあってもなくても、信者を励ますために、すべての教会を訪問すると公言しています。信徒、主任司祭、司教が一体となるとき、そこに教会の十全な姿が出現します。だから力がわくのです。

○赤字解消のためのキャンペーンにご協力を!
会計部は来たる「教区経済問題評議会」(旧教区財務委員会)と「教区司祭地区財務委員会」に教区会計の赤字解消のための具体的な提案をさせていただきます。その提案が見事通過した折には、皆様のご協力をお願いいたします。(教区会計 中野裕明)

過去7年の教区費の推移 (2000年～2006年)



北薩でキリストの物語を告げ知らせよう カトリック北薩大会

5月20日(日)
大口明光学園講堂

- 10:30 開会行事とミサ (宣教奉仕者選任式)
- 12:00 昼食
- 13:00 明光学園吹奏学部演奏
- 13:30 講話 郡山司教
- 14:30 閉会行事



へえ、日本の教会は今こうなんだ...
ザビエル

カトリック新聞は、日本のカトリック教会唯一の週刊全国紙です。全国、海外の読者様のお手元へ毎週届きます。また、全国のサンパウロ・女子パウロ会書店でも販売しております。

〒125-8585 東京都江東区東横 2-10-30 日本カトリック会館5階 カトリック新聞社
TEL 03-5632-4432 FAX 03-5632-7030 Email kodoku@cwjpn.com

カトリック新聞
1部本体価格150円(税・送料別)
購読料金(前納、税・送料込)
半年4740円・1年9480円

見本紙贈呈いたします

スピリチュアルケア
一日研修会ご案内

「本物のホスピタル・本物のホスピス」
講師: W・キップス神父
日時: 6月17日(日)9時30分～

田平新太郎選
鹿児島 徳永ノブ子
ここからも十字架見ゆる春の空
(評) 結句の「春の空」は作者の祈りの心
純心学園 山頭信子
故郷の便り電話はひじき刈り
さわやかに合格知らず侍者少年
(評) さわやかな結句がすてがたい。
出水 遠竹睦郎
マリア像飾れる部屋は春の朝
鹿児島 本城 愛
せかされて散る花びらの舞もどり
阿久根 中津濱フサエ
さくら咲くみそのの庭に愛し花
鹿児島 春山マリ子
今日の日を夢に描いて冬を知る
(評) 「冬を知る」が佳作にした。
純心学園 川上 和
ゴーゴーと箆目鉄橋筑後川

俳句 (思川俳句会作品)
放牧の馬瘦せてをり花の山 出水 沖 弘子
ひかさるるアンジェラスの鐘や夢ん中 選者詠
短歌 (思川短歌会作品)
田平新太郎選 出水 遠竹睦郎
細川ガラシャの墓を友らと詣でつつ
戦国の世に想ひを馳せり
(評) 真の信仰を四、五句で詠み得た佳作
阿久根 眞清水 藍
さざ波は早春の譜を奏でおり川面に
白き雲を映して
(評) 結句で詩の響きを表白してよい。
阿久根 窪田ヒサエ
苦しみの荷を降ろさんと十字架を仰
げばやさし主のまなざしは
(評) 「主のまなざし」の結句が尊い。
大口 森 博伸
主よ我は渴けるころの砂時計残り
わずかな時を刻めり

奄美 林 明子
夕やけにそまる心さびしいな主よやわ
らかくつつんで下さい
奄美 林 常広
わが妻の朝の寝顔は清々しい天使の笑み
を想わせるかは
鹿児島 春山マリ子
手芸なららせて欲しいと言ふものの仕
上るまでの難儀は言えぬ
鹿児島 前田儀子
クロバーの茂みに家なき猫がみてフ
ランスよりの便りが届く
阿久根 中津濱フサエ
ささいなるわだかまり胸にいだきつつ
愛を求めてひたすら祈る
純心学園 川上 和
屋下がりフランス寺をさりげなく潜め
る村人「サンタマリアヨ」と
古仁屋 豊島忠司
晴れやかな笑顔がならぶ図書室に復活祭
の弁当かこむ
選者詠
石路の咲きつく路を妻と行く亡き師をし
のびつはぶきを詠む